

博士論文要旨

日本の外国人技能実習プログラムにおけるインドネシアの 役割：渡航前調教、沈黙の通常化、夢のリサイクル

立命館大学大学院国際関係研究科
国際関係学専攻博士課程後期課程
ユシ ウィダラヘスティ
YUSY WIDARAHESTY

本論文は、日本の外国人技能実習プログラムに参加するインドネシアの実態を分析するものである。外国人技能実習制度に関しては、従来から多くの研究がある。しかし、その多くが受入国としての日本の問題に注目するもので、例えば日本の移民政策の変容や、技能実習制度を取り巻く社会的・経済的・政治的な環境の変化、さらには実習現場での様々な人権侵害などが研究されてきた。反面、送り出し国の視点からの研究は、皆無ではないものの、それほど多くはない。とりわけ、インドネシアに関しては、技能実習に関する総合的な研究は行われてこなかった。しかし、このプログラムが二国間の取決めで維持・継続されてきたことを鑑みれば、送り出し国が果たしてきた役割を十分に分析することなく、技能実習にまつわる複雑な問題を解明することは不可能だと言える。その溝を埋めるのが本研究の目的である。

本論文では、技能実習プログラムに関与するインドネシアの様々な主要アクターを考察し、それぞれの役割を分析する。代表的なアクターは、インドネシア労働省であり、監理団体、在日インドネシア人コミュニティ、元技能実習生、そして現役実習生たちである。それらのアクターが、プログラムに関わる3つの過程——すなわち渡航前、実習中、実習後——において、どのような役割を果たしてきたのか。それらが、国際的にも批判が多い技能実習制度の持続にどのように貢献してきたのか。この2つの問いを追究するのが本論文である。

エスノグラフィーを中心とした実証研究を通じて、本論文が明らかにしたことは、上記のアクターが、各ステージ（渡航前、実習中、実習後）において、プログラムに対する批判の声を体系的に封じ込めている力学である。その上で、この「封じ込め」の沈黙作用こそが、インドネシア人技能実習プログラムに安定と強靱性を与えてきたことを議論にする。これらの分析は、インドネシアの移民研究に新たな知見を提供することで、インドネシア研究の前進に大きく貢献する。また、送り出し国の問題を中心に捉えることで、日本の外国人単純労働者受け入れに関する主流な言説——すなわち搾取する日本と搾取される送り出し国というナラティブ——を問い直すきっかけを与えよう。その二項対立的な議論は現実と乖離しており、複雑な実態を客観的に分析することの重要性を本論文はアピールする。